

保育者が絵本を用いる意義の違い

—幼稚園教育要領における非認知能力の育成にむけて—

Kindergarten teachers' perspective differences about using picture books: Interviews for application to improving non-cognitive skills in early childhood education

畑山 朗詠* 増田 貴人**
Akie HATAYAMA * Takahito MASUDA**

*青森中央短期大学幼児保育学科 **弘前大学教育学部

*Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

** Department of School Education, Faculty of Education, Hirosaki University

Key words : 絵本、保育者、非認知能力

1. 背景と目的

平成30年度に改訂された幼稚園教育要領（2017）が実施されることとなった。新しい幼稚園教育要領では、基本的な考え方が従来から大幅に変更されたというわけではない。ただ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をイメージした保育実践やカリキュラム・マネジメントの重視など、幼稚園教育で何をどこまで学びその成果を小学校教育にどう接続させていくかが、これまで以上に強調されている点が大きな特徴といえるだろう。

なかでも、人間関係に関する領域は最も改訂されており、例えば、子どもたちが互いに関わりを深め、自ら行動し共通の目的に向かって協同的に遊ぶようになることや、社会の規範意識や自己抑制する力が育つこと、自ら物事に前向きに取り組もうとする気持ちが育つこと、などが書き加えられた。これらのスキルは、OECD（経済協力開発機構）も近年重視している概念で、非認知能力あるいは社会情動スキル（以下、非認知能力）と呼ばれる。非認知能力は、ペリー就学前プロジェクト（Perry Preschool Study）の成果で国際的によく知られるようになった。1960年代の米国で行われたペリー就学前プロジェクトでは、家庭環境に恵まれず学業不振に陥る危険性がある子ども達に対して非認知能力を育てることに重点をおいた幼児教育を行った結果、学業や働きぶり、社会的行動に肯定的な結果をもたらし、その効果は壮年期に至るまで継続することが示されたのである。

ヘックマン（2015）は、ペリー就学前プロジェクトの成果を非認知能力の重要性の根拠の一つとして示しつつ、人生で成功するかどうかは、認知能力では決まらず、肉体的・精神的健康や、根気強さ、注意深さ、自信といった非認知能力が欠かせない、と述べている。また、幼稚園教育要領の改訂

に尽力した無藤（2016）も、「これまで日本では粘り強さや挑戦する気持ちなどの育成はそれほど重視されていなかった」と指摘した。

改訂後の幼稚園教育要領では、このように、非認知能力の育成が重視されるようになったといえる。そのようななかで、日々の保育において、非認知能力の育成をどのように具体化していくかは、新たな、そしてとても重要な課題である。

例えば、保育現場ではほぼ毎日絵本が読まれている。菊井・菅（2016）は、保育時間中における絵本の読み聞かせの実態として、毎日読み聞かせをしている保育者がいずれの年齢でも約80～90%にのぼり、週2、3回程度と回答した者も含めると97%にもなっていたことを質問紙調査により明らかにした。いわば日常的な営みともいえる絵本の読み聞かせについては、ただ単に言葉をはじめとする認知能力を育てるためだったり、活動の合間をつなぐだけだったりといった意味だけではないはずである。仲本（2015）も絵本の読み聞かせについて、人とのつながりやその他の保育活動と関連し合いながら、子ども自身のさまざまな活動へと広がっていくことが重要だと述べている。つまり絵本の読み聞かせにも、非認知能力を育てる要素が含まれていると考えるべきだろう。ただ、それをどのように考え具体化していくかに直接触れた先行研究は見当たらない。

そこで本研究では、保育の中で頻繁に行われている絵本場面を取り上げ、絵本を通じた保育に対する保育者の認識の違いに着目し、改訂後の幼稚園教育要領が示している非認知能力をどうとらえなおしていけばよいのかを検討する。

2. 方法

1) 研究協力者

X県内のY幼稚園の年長クラス担任2名である。それぞれ、保育経験10年のA先生と保育経験3年のB先生で、いずれも年長クラスを担任している。

2) 手続き

研究協力者のA先生・B先生両名には、所属する幼稚園ではない閑静な場所を確保し、2017年5月下旬に、それぞれ調査的面接法による1時間程度の半構造化インタビューを行った。インタビュー内容はICレコーダーで録音し、後日逐語録を作成し分析の資料とした。

質問内容は以下の9点である。

- ① いつ絵本を読むか
- ② 読み聞かせをしている時に配慮していること
- ③ 読み聞かせをしている最中に、子どもが発言をした時どうしているか
- ④ 読み聞かせが終わった後、どうしているか
- ⑤ 幼稚園での読み聞かせ場面、一人で絵本を読む場面、それぞれの良さは何だと思うか
- ⑥ 絵本を読むことから遊びにつながったことはあるか、あるとしたらそれはどのようなものか
- ⑦ 何のために絵本を読むか
- ⑧ 絵本の選び方、選ぶ際の留意点
- ⑨ 絵本は子どもにとってどのような効果があると考えるか

インタビュー終了後に速やかに作成された分析資料から、本研究の主たる関心である「絵本の読み

聞かせについての配慮」と「絵本を読み聞かせることの意義とは」の2点に焦点をあてたテーマ分析 (Riessman, 2008; 灘光・浅井・小柳, 2014) として、それぞれのテキストを解釈することとした。

3) 倫理的配慮

研究協力者のA先生・B先生両名には、インタビュー実施にあたり、プライバシーの厳守、インタビュー内容の録音、データの取り扱いについて事前に説明をして調査協力への依頼と意思確認を行い、あわせて実施直前に同意書の提出を求めた。なお研究実施者と研究協力者に開示すべき利益相反関係はない。

3. 結果

1) 絵本の読み聞かせについての配慮

結果について、発言の要点をまとめたものが表1である。

いつ絵本を読むのかについては、どちらの保育者も、朝の集会時や降園前、ちょっとした空き時間

表1 保育者へのインタビュー結果

質問項目	A先生の発言の要点	B先生の発言の要点
①いつ絵本を読むか	<ul style="list-style-type: none"> 朝の集会 降園前 活動前の導入 	<ul style="list-style-type: none"> 朝の集会 クラスでの休まる時間 行事前の導入
②読み聞かせをしている時に配慮していること	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの様子を見ながら役になりきる 子どものつぶやきを聞く 	<ul style="list-style-type: none"> 声の大きさやトーン 抑揚をつける
③読み聞かせをしている最中に、子どもが発言をした時どうしているか	<ul style="list-style-type: none"> 受け止め、共感する その発言についてみんなで考える 	<ul style="list-style-type: none"> 受け止め、共感する 発言によってはアイコンタクトや顔きで対応する
④読み聞かせが終わった後、どうしているか	<ul style="list-style-type: none"> 絵本の内容や大事なところを振り返る 子どもがまた見られるよう目の届くところに絵本を置いておく 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返ったり問いかけたりする 絵本の内容について子どもとのやり取りを楽しむ
⑤幼稚園での読み聞かせ場面、一人で絵本を読む場面、それぞれの良さはなんだと思うか	(幼稚園での読み聞かせ場面)	(幼稚園での読み聞かせ場面)
	<ul style="list-style-type: none"> 絵をメインに見られるので想像力がふくらむ みんなで同じ絵本を見る楽しさを感じられる 	<ul style="list-style-type: none"> みんなでその絵本についての感想を共有できる
⑥絵本を読むことから遊びにつながったことはあるか、あるとしたらそれはどのようなものか	(一人で絵本を読む場面)	(一人で絵本を読む場面)
	<ul style="list-style-type: none"> 文字への興味 自分のペースで読める 	<ul style="list-style-type: none"> 声に出して読める 自分で読みたい絵本を選択できる
⑦何のために絵本を読むか	<ul style="list-style-type: none"> 話を聞く態度や集中力が身につくように 落ち着く時間へのきりかえ 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の思いや決まりごとなどに気付けるように 遊びにつながるように
	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの興味 自然に関するもの 子どもが選んだもの 	<ul style="list-style-type: none"> 季節感を取り入れたもの 子どもの生活に関連した内容 みんなで楽しめる内容
⑨絵本は子どもにとってどのような効果があると考えるか	<ul style="list-style-type: none"> 考える力、想像力、集中力が身につく 聞くこと、見ること、話すことの態度が育つ 言葉の成長や人とのコミュニケーションにつながる 色や絵のキレイさへの気付き 	<ul style="list-style-type: none"> 主人公に自分を重ね、相手の気持ちになって考えることができる 新しいこと、未知への気付き 挑戦してみたいという気持ちが芽生える

がある時に、絵本が利用しやすいと考えていることがうかがえる。また、活動や行事の前の導入として絵本を使用することも共通しており、保育の中で絵本はあらゆる場面で用いられている。「帰る前に少し落ち着かせたいときに（A先生）」「クラスのちょっとした休まる時間とか行事がある時の導入とか（B先生）」という発言から、絵本のために時間を設けるというよりは、ある活動の導入や次の活動への滑らかな繋ぎとして活用していることがうかがえた。

絵本の読み聞かせの時に配慮していることは何かという質問に対し、両者ともに子どもに目を向けながら声の大きさやトーン、登場人物などを意識した工夫があげられた。そして、A先生からのみ、「つぶやきは捨てるようにしている」と子どものつぶやきを聞くようにしているという回答が得られた。これは、保育者による一方通行の読み聞かせではなく、子どもの小さな発言にも目を向け、相互に関わりながら絵本の読み聞かせを行おうとしていることが見受けられる。

さらに、絵本の読み聞かせをしている最中の子どもの発言に対してどう応じているか尋ねたところ、両者ともにまずは子どもの発言を受け止め、共感することを重視していると回答した。さらにA先生は、「大事だなんて思うところだったら、その発言についてみんなで考えてみたり」と発言を受け止めるだけでなくみんなで考えることへつなげようとしていた。一方B先生は、子どもの発言に共感をしつつも、「大事なところだったら一つずつの発言に声はかけなくても、アイコンタクトとか頷きとかはありますね」と、絵本の内容に関係のない発言と判断したときはアイコンタクトや頷きで対応していたと回答した。

また、読み聞かせが終わった後についても、どちらの保育者からも、絵本を読み終わった後に子どもの思考や発言を促すような働きかけの意図が集約されていた。すなわちそれぞれ、子どもが絵本の内容について理解を深めたり、関心を高めたりできるよう、絵本の振り返りを行っているという回答していた。

幼稚園での読み聞かせ場面、一人で絵本を読む場面、それぞれの良さを尋ねた質問に対し、幼稚園での読み聞かせ場面については両者ともに、「集団の時は文字よりも絵をメインに見られるから、その絵を見て自分がどうとらえるか想像力が膨らんだり（A先生）」「みんなで読むときは、その絵本に関して感想を共有できる（B先生）」のように、絵本の内容の共有や集団としての一体感という点で共通していた。一人で絵本を読む場面についても、「文字を覚えてで音読の初期段階というか（A先生）」「年長になれば字も読めるようになるし、ゆっくりだけど声に出して読めるようになって（B先生）」と、年長児であればある程度ひらがなも読めるようになり、声に出して読むことができ文字への興味につながると回答していた。

絵本を読むことから遊びにつながったことはあるかの質問に対し、いずれの保育者からも、絵本から遊びにつながったことはあると回答された。例として「クラスに図鑑絵本も多くあって、そういう絵本をみて例えば非常口のマークを絵本で見たら幼稚園の中を探しに行くとか（A先生）」「“きよだいな きよだいな”っていう絵本から巨大なものを作ろうぜって子どもがなって、それぞれ折り紙とか画用紙を持ってきて紙飛行機を折って、それをつなげてる様子がありましたね（B先生）」と回答された。これらは、保育者が意図的に働きかけている場合／いない場合にかかわらず、子どもが絵本の世界の出来事を現実の世界と結びつけ、探検や制作活動などの遊びに反映されていたという。いずれの保育者も、絵本がきっかけとなり、友達と関わりながら意欲をもって主体的に遊びを展開してい

る子どもの様子を観察していたことがうかがえる。

2) 絵本を読み聞かせることの意義とは

何のために絵本を読むのかの質問に対し、A先生は話を聞く態度や集中力の育成、場面の切り替えなど、絵本を用いることによる子どもの行動の直接的な変化を期待していた。一方B先生は、自分で物事を考えることや相手を思いやること、遊びが発展することを指摘し、絵本で語られる内容をきっかけとして、子ども自身が活動を広げていこうとする内省的变化を重視していた。ただ、「こんなお話だったねって振り返ったり、それをクイズにしたり、特に大事なところを子ども達に伝えたりして、心の成長とか学びにつなげたい(A先生)」「振り返りとして“〇〇はどうなったのかな?”とか子ども達に問いかけると、子ども達も思い出しながら“〇〇だった!”っていうのが結構聞けるので、そういう質問から子どもが大事な部分に気付ける終わり方ができればいいなって(B先生)」のように、絵本を読み終わった後の振り返りを大切にしていた点は共通していた。

絵本の選び方や留意点についての質問に対し、どちらの保育者も、子どもの興味や出来事、季節感など日頃の子どもの興味や生活に基づくものを選ぶようにしていた点が共通しており、日々の子どもの姿を理解しながら絵本を選択しているのだろうと考えられた。ただその方法については相違がみられた。A先生は、「子どもが家から自分の好きな絵本を持ってくることがあって、そのシリーズ絵本を読む時もある」と、保育者が選んだ絵本だけではなく子どもが選んだ絵本を読むことがあるエピソードをあげ、子ども主導の絵本選択場面があることをうかがわせた。その意図として、子どもが選んだ絵本を読むことをきっかけに同じシリーズの違う絵本を読むことにつながったり、子どもが読んで欲しい絵本を家から持参したりするなど、絵本への主体的関与につながる可能性を示唆していた。一方B先生は、クラス場面でも異年齢場面でもみんなで楽しめる内容のものを重視していたが、その絵本の選択は保育者主導で一貫していた。

絵本は子どもにとってどのような効果があると考えられるかの質問に対し、「考える力、想像力につながったり人とのコミュニケーションにつながったり(A先生)」「絵本を通して自分が知らないことを知ったり、自分もやってみたいなって思ったりすることもあるだろうし(B先生)」というように、両者とも子どもの能力や態度に関することだけでなく、子どもにとっての新たな発見や挑戦してみたいという意欲などの効果も指摘していた。

4. 考察

本研究では、保育の中で頻繁に行われている絵本場面を取り上げ、絵本を通じた保育に対する保育者の認識の違いに着目し、改訂後の幼稚園教育要領が示している非認知能力をどうとらえなおしていけばよいのか検討した。

保育経験の異なる保育者に対するインタビューから、保育場面における絵本の読み聞かせの際、短期的な視座では文字や言葉などの認知能力に注目する保育者と、考えることや新たな発見、挑戦する気持ちなど非認知能力に注目する保育者に分かれていた。両保育者が年長クラスの担任であることを考えると、保育経験の長いA先生の方が、認知能力が求められるようになる小学校への準備として、幼小接続を見通した回答をしていた可能性がある。またB先生も、自らの行動としては、絵本の選択や読み聞かせ中の子どもの発言への対応について保育者主導の保育が読み取れる回答もあり、規範意

識とともに聴取や発話をはじめとした認知能力への対応がうかがえる。つまりB先生も、回答として直接的に認知能力を表現しなかっただけで、認知能力を意識していなかったというわけではないのだろう。つまり、絵本の読み聞かせの短期的な意義としては、ある程度認知能力の育成を意識しつつも、その手立てについては、保育者の保育経験や保育観の違いとの関連が示唆される。

一方で、長期的な視座で改めてとらえなおしてみると、両者とも非認知能力を重視していたと考えられる。インタビューでは、読みたい絵本を自ら選択する、主人公に自分を重ね考える、人とのコミュニケーションにつながる、といった回答がみられ、絵本をきっかけに子どもが主体的に考えたり友達と協力したり、自己決定することを重視していた。さらに絵本の読み聞かせが終わった後についても、両者ともに読後にふりかえりをして子どもの思考や発言を促すように働きかけることを心がけていた。一見認知能力を重視するような回答が目立っていたA先生も、絵本の読み聞かせ場面では子どものつぶやきを拾ったり、子ども同士の相互作用を促したりして、協同的な活動を志向していた。いわばこれまでの幼稚園教育のなかでも、決して非認知能力が軽視されていたわけではなく、ただあまり強く意識されていなかったということなのかもしれない。意欲・心情・態度を基本とする幼児教育において、特に保育者から子どもの意欲に働きかけたり、やってみたいという子どもの心情から実際の行動へと移せるよう誘い出したりするかたちで、これまでも保育内容の設定において非認知能力の育成に関わっていたのではないかと考えられる。

ただ幼児期は、認知能力・非認知能力どちらかのみを育てればいいというわけではない。認知能力のような“目に見える”力と、非認知能力のような“目には見えない”力が相互に作用し、互いに影響を与えあっていくのである。そのため改訂後の幼稚園教育要領が示す方向性をふまえ、保育者が非認知能力についての理解を深め、非認知能力と認知能力は絡み合って育っていくということを認識する必要があると考える。そしてそれを念頭に置いた環境構成を考え、保育を行っていくためのさらなる実践的工夫が問われてくると考える。

保育現場で実践をしていくその工夫のひとつとして、本稿では、話し合いの重視を提案したい。話し合いでは、子どもは自分の考えを発言し、友達の意見を聞き、またそれをみんなで考えるなかで、「見えなかった関連、言葉へのこだわり、思いもしなかったような疑問や質問など、一人で読んでいて（聞いていて）は出せないものに、話し合うことでたくさん出会うことができる（吉田，2018）」。そして子どもは、自分の意見に自信を持ったり、友達の考えに共感したり、話し合いに参加したいという意欲をもったり、という非認知能力につながる部分を育てたりすることができる。さらに子どもは、保育者と対話を繰り返す中で、話している言葉と絵本の中にある言葉や文字を結びつけていくことができ、それが次第に言葉や文字に対する興味を深めていくことになる。保育者がインタビューの中の一人で絵本を読む場面の良さとしてあげていた、ある程度ひらがなも読めるようになり、声に出して読むことができ文字への興味につながるという、認知能力を育てることにもつながるだろう。つまり、絵本を読み終わった後の振り返りの中で、ただ正解を求めるような質問ではなく、登場人物について考えたことや、良かったと思う部分、悪かったと思う部分など、子ども達と一緒に考え話し合いをする時間が、今後より重要になってくるのではないだろうか。

このように、読み聞かせの目的やねらい、子どもの育てたい姿をどうもつかによって、様々な展開の仕方が考えられる。本研究においても、絵本を読むことが導入や活動のつなぎとしてのツールに

なっていることが目立っており、絵本の読み聞かせが決して特別な活動時間ではなくなっていると思われた。だからこそ、絵本を通じて一人ひとりの子どもに必要な体験が得られるようにするためにどうすべきか、そして子どもの非認知能力の育成と認知能力との関連をどのように具体化していけばよいのか、提供すべき絵本や保育内容、読後の子どもへの働きかけ方について、改めて検討していくことが必要になってきていると考える。

ただし本研究は年長クラスの担任へのインタビューによる検討のため、年中児や年少児、乳児・未満児を含め、どの年齢にもあてはまるとはいえない。今後、発達段階や各年齢をふまえて絵本をどのように提供していけばよいのか検討していく必要がある。

参考文献

1. ヘックマン・J・J (大竹文雄 [解説]・古草秀子 [訳]) (2015) 『幼児教育の経済学』東洋経済新報社
2. 菊井恭子、菅眞佐子 (2016) 「集団での読み聞かせに対する保育者の意識の変化－保育経験と担当年齢による差異の検討から－」『滋賀大学教育学部紀要』66, 39-54
3. 文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』
4. 文部科学省 (2016) 「幼児教育部会における審議のとりまとめ」 (URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377007_01_4.pdf 2017年5月2日アクセス)
5. 無藤隆 (2016) 「生涯の学びを支える非認知能力をどう育てるか」『これからの幼児教育』ベネッセ教育総合研究所
6. 灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津 (2014) 「質的研究方法について考える：グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、アクションリサーチを中心として」『異文化コミュニケーション論集』12, 67-84
7. 仲本美央 (2015) 『絵本を読みあう活動のための保育者研修プログラムの開発』ミネルヴァ書房
8. Riessman, C. K. (2008). Narrative methods for the human sciences. Thousand Oaks, CA: Sage.
9. 吉田新一郎 (2018) 『読み聞かせは魔法!』明治図書出版株式会社

